文化財をたずねて

No.16

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋81　TEL 43-6962）

高雄地区の文化財めぐり

富原停車場跡

1　富原停車場跡

赤穂鉄道は大正10年（1921）4月14日から昭和26年（1951）12月11日の約30年間、赤穂市の南北を結ぶ軽便鉄道であった。国鉄赤穂線の開通に伴って廃線となったが、これらのルートの多くは赤穂市に寄贈されて道路敷となり、現在も市民生活や産業振興に大いに寄与している。

赤穂鉄道は、播州赤穂駅から砂子停車場、坂越駅、目坂停車場、根木駅、周世停車場、真殿駅、富原停車場を経て、有年駅とを結ぶもので、総延長は12.7kmであった。駅員は播州赤穂駅、坂越駅、根木駅、真殿駅、有年駅にのみ配置された。運行は1日7～13往復で、播州赤穂～有年駅間で大人1人45銭だった。

富原停車場は、乗降客がある場合にのみ停車する無人駅で、待合所のみの簡便な建物であった。富原の集落はかつて15軒ほどの小さな村であったが、この停車場は子供の通学のために設置された。また赤穂鉄道を利用しないと交通に不便だったため、村全体が赤穂鉄道に協力的であったという。現在もわずかながら広場が残り、当時の雰囲気が偲ばれる。なお、眼下の田畑には、ほ場整備事業に伴って昭和61年（1986）に発掘調査され、弥生時代後期や中世の土器片などが出土した**富原遺跡**がある。

大避神社（中山）

2　大避神社（中山）

祭神は秦河勝。村社。境内に妙見堂、天満神社、荒神社を祀り、かつては末社それぞれの祭事を行っていた。江戸時代、中山は尾崎の八幡宮を氏神としていたが、明治に東有年八幡神社の氏子に替わった。明治7年（1874）5月奉納の鎧武者絵馬が一番古く、それ以前に建てられたと推定される。その後数々の絵馬とともに明治9年（1876）9月17日に神前形の石灯籠が、明治32年（1899）に狛犬、玉垣が奉献されている。

真　殿　駅　跡

3　真殿駅跡

蒸気機関車の給水施設と交換設備を備えており、客の乗り降りはなかった。給水には、山からの流水を利用していた。

釣瓶落としの滝

4　釣瓶落としの滝

真殿・中山林地区から大津へ通ずる山道を1.2kmあまり登ると、2段になった約8mの滝がある。『赤穂郡誌』には「釣瓶落ノ滝ハ真殿村ノ林谷ニ在リ、懸垂一丈五尺、其滝壺ハ真円ニシテ其深サ一丈余リ、亦一奇観ナリ」とあり、滝の上には明治21年（1888）5月に真殿・中山の世話方室井定四郎と前田弥四郎が寄進した地蔵尊が祀られている。

その昔、山頂近くに住む僧がこの滝壺の水を汲んでいたが、釣瓶を滝壺に落としたところ浮き上がらなかった。その釣瓶は大津の川に浮き上がってきたといい、滝壺の底がずっと深く大津まで続いているという伝説がある。

播龍山夕雲寺

5　播龍山夕雲寺

真殿村民の希望により、寛政11年（1799）に赤穂萬福寺内の夕雲坊を移転したもので、明治11年（1878）に寺号の公称が許可された。真宗大谷派に属する。

6　天満宮（真殿）

祭神は菅原道真。村社。境内には三宝荒神社を祀る。千種川の東側、周世から有年へ通ずる道路沿いに祀られていたのを現在地に移したものである。真殿は、かつて周世の八幡宮の氏子だったが、「村の鎮守の神」として天満宮を移しかえたといい伝えられている。

天満宮（真殿）

7　真殿門前遺跡

昭和40年（1965）に、山陽新幹線建設に先立って兵庫県教育委員会による発掘調査が行われ、須恵器、土師器、宋銭などが出土している。

8　真殿門前古墳群

真殿門前の集落西側に迫る山裾から山中の雑木林の中に4基の古墳がある。谷の入り口でも須恵器や勾玉が採集されているほか、門前奥の南側にある清水谷にも古墳1基が残っている。。

横穴式石室は崩壊が著しく、石室の長さは墳丘規模が最大である4号墳（7.3ｍ）を除き、5ｍ以下である。すべて6世紀末から7世紀前半ころの古墳と推定される。

枯　木　地　蔵

9　枯木地蔵

塩屋と木津とを結ぶ山道の頂上に、慶応2年（1866）7月23日大津屋善右衛門他8名によって建立された。身の丈約1ｍの立像で、基壇等を含めると約2ｍある。仏身を完全に造り出した一尊丸彫の石仏である。右手に錫丈、左手に宝珠をもち、笑みを浮かべたおちょぼ口の大変穏やかな表情をしている。かつては8月23日には地蔵盆が行われ、農作業を休んで村の代表が参る日とされていた。

赤穂ふれあいの森

10　赤穂ふれあいの森

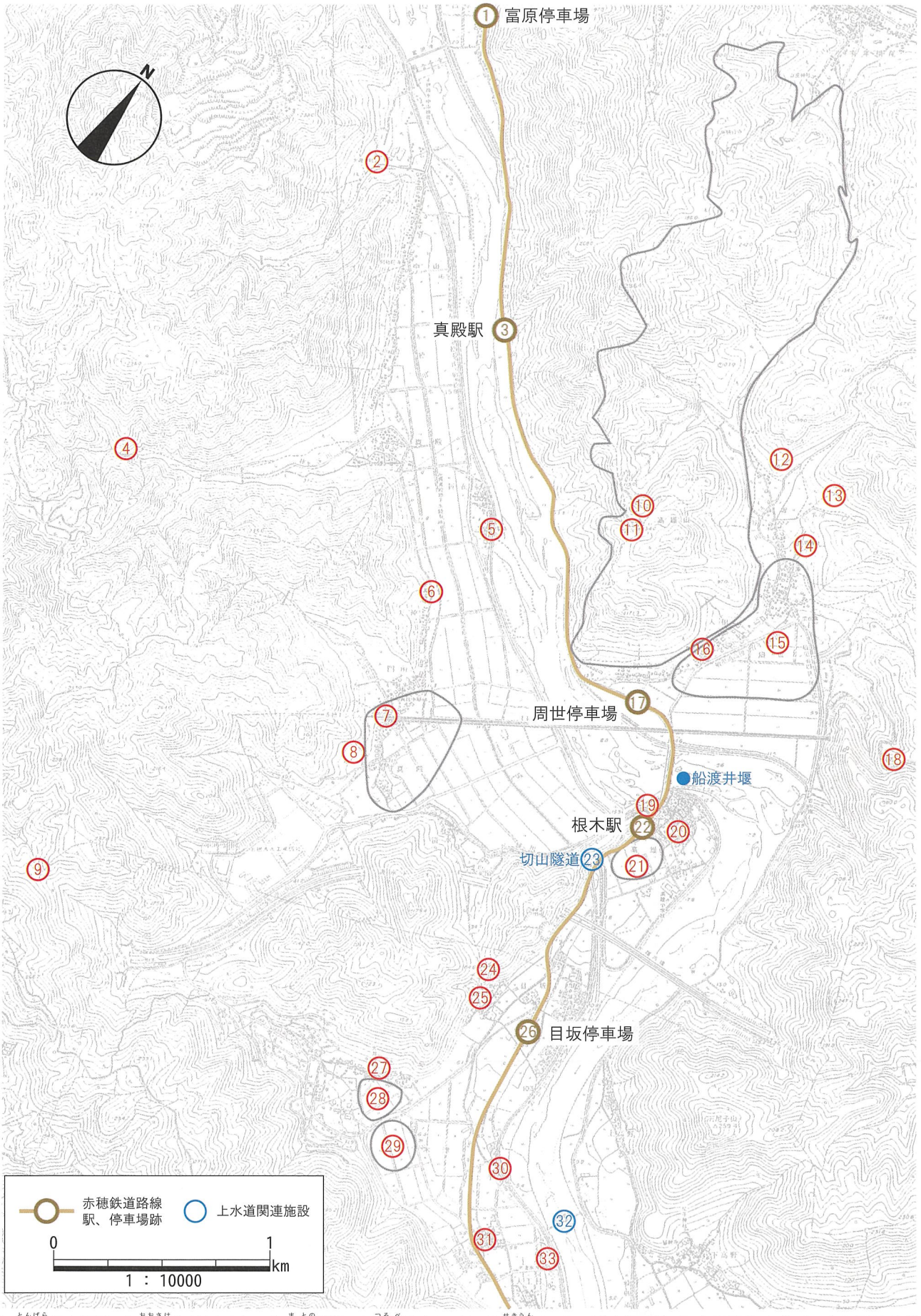
有年横尾の験行寺から周世の神護寺までを含む、約180haの森林区域。シイ、アカマツ、コナラ、シリブカガシといった様々な植生を見ることができ、「赤穂ふれあいの森」として遊歩道、休憩所、展望台や木製遊具、キャンプ広場などが整備されている。神護寺近くにはロッジ「高雄山荘」、モリアオガエルのいるひょうたん池、シイ林、ヒノキ林などがあり、森林散策を楽しめるようになっている。

高雄山神護寺

11　高雄山神護寺

周世集落の西方の山頂にあり、文治2年（1186）文覚が開創したと伝えられる。しかし『播磨鑑』によると、同寺を天台宗の寺とし天平神護の元号（765～767）にちなんで寺号が付けられ、和気清麻呂が建立したとある。その後、豊臣秀吉の中国侵攻で兵火に罹り、後年に再建されたという。浅野長直寄進の扁額、大石良欽寄進の手水鉢のほか、大石内蔵助良雄寄進の石灯籠などがある。

明治27年（1894）1月8日に記された『神護寺記』によれば、「天台宗、本尊正観音御丈一尺五寸立像、堂宇庫裏合併桁行7間梁行5間、その他山王堂、稲荷堂」等の記述がある。



1 富原停車場跡 2 大避神社(中山) 3 真殿駅跡 4 釣瓶落としの滝 5 夕雲寺 6 天満宮(真殿) 7 真殿門前遺跡 8 真殿門前古墳群 9 枯木地蔵 10 赤穂ふれあいの森 11 神護寺 12 周世黒谷刻印石 13 周世宮裏山古墳群 14 八幡神社(周世) 15 周世・入相遺跡 16 尊念寺 17 周世停車場跡 18 船戸山古墳群 19 荒神社(高雄) 20 安楽寺 21 高雄・根木遺跡 22 根木駅跡 23 切山隧道 24 荒神社(目坂) 25 常徳寺 26 目坂停車場跡 27 大避神社(木津) 28 木津・段ノ上遺跡 29 木津・原遺跡 30 道標地蔵 31 龍泉寺 32 木津取水井堰 33 太子堂

周世宮裏山古墳群

八幡神社（周世）

周世・入相遺跡

一乗山専念寺

周世停車場跡

12　周世黒谷刻印石

黒谷の西側尾根中腹、**周世黒谷古墳**より上方20ｍのところに不思議な刻文のある石がある。約１ｍ×0.6ｍの規模の石材で、いくつかの正円に直線が貫通している図柄が複数描かれている。

13　周世宮裏山古墳群

昭和23年（1948）夏に研究グループによって調査が行われ、約28の墳丘とその崩落状況が確認された。その後、昭和40年（1965）には赤穂市文化財調査委員会（代表：故松岡秀夫有年考古館長）によって１号墳から28号墳の横穴式石室墳が実測されている。すべて円墳で、ほとんどが墳丘径10ｍ以下の小古墳である点が珍しい。出土品には、土器片及び釘状鉄製品、耳鐶がある。平成16年度に赤穂市教育委員会による測量調査が行われ、若干の補訂がなされた。一部の古墳には、石組みによる土壌の流出を防止する施設が見られる。

周辺には、**周世水木原古墳**と**周世黒谷古墳**があり、いずれも横穴式石室を埋葬主体とする単独墳である。周世水木原古墳はなかでも比較的規模が大きい。

14　八幡神社（周世）

祭神は、誉田別命、息長足姫命、武内宿祢。境内には荒神社（末社）、右には火魂神と秦河勝を合祀、左には火魂神を祀る。

15　周世・入相遺跡

昭和20年代に瓦材土の採土中に発見され、弥生時代中～後期の住居跡や炭化した柱、土器や石器が採集された。昭和57～63年度の発掘調査では、多くの住居跡や弥生時代後期前半の良好な土器群が見つかるなど大きな成果を挙げた。また古墳、奈良、平安時代の遺物が採集されており、古くから集落が営まれていたことがわかる。

16　一乗山専念寺

真宗大谷派に属する。文亀３年（1503）僧玄誓の開基。玄誓は俗名山名三郎左衛門時氏といい、白旗城の戦で敗れ家来36人とともに周世に逃れて仏門に入り、草庵を結び開基したとされる。第三世玄智が本願寺より寺号を賜わった。境内のイチョウは巨木で有名。明治26年（1893）に本堂が再建された。

17　周世停車場跡

駅舎がバラック小屋の無人駅であった。乗る人がいない限り、降りる旨を伝えないと止まらなかったという。下りの場合、根木鉄橋までの勾配で減速した際に、跳び降りることもあったという。

現在、千種川に架かっている高雄橋は、当時あった根木鉄橋のトラストをモチーフに造られたもので、現在も橋脚基礎が残っている。

18　船戸山古墳群・船戸山遺跡

周世集落東方の山には、横穴式石室を埋葬主体とする５基の古墳がある。これらは周囲と同様、６世紀末から７世紀前半にかけての群集墳である。また、さらに山を登ったところに、古墳時代から平安時代にかけての土器が散布する船戸山遺跡があり、当該時期の集落がよくわかっていない千種川流域において、貴重な資料となるだろう。

19　荒神社（高雄）

祭神は火魂神であり、千種川の流れを緩やかにする切山の中腹に建てられている。高雄村にとって、切山は千種川の洪水から守ってくれる堤防の役割を果たしており、人々が洪水の回避を願って建立したものと思われる。元は西山の南にあったという伝承が残されている。

切　山　隧　道

20　仏日山安楽寺

安室荘の大聖寺城主安室五郎（文安5年＝1448卒）が発心し、真殿村本西門前に一坊を建てて安楽坊と号したといわれ、現真殿門前の字名は安楽坊が在ったことに由来する。寺は明応4年（1495）8月13日に道誓が開基した。寺地は縦14間2尺、横10間とされる。真言宗であったが、真宗大谷派に改宗して今の地に移転された。明治31年（1898）、平成元年（1989）の大改修を経て現在に至る。

荒神社（高雄）

21　高雄・根木遺跡

ほ場整備と公民館、体育館新築工事に伴って発掘調査された遺跡で、縄文時代後期から江戸時代までの遺物、遺構が見つかった。特に弥生時代後期の竪穴住居内の土器群や、古代の官衙に関係すると思われる均整な配置をもつ掘立柱建物群が注目される。旧千種川の護岸や赤穂旧上水道導水路跡なども確認されており、切山に守られた比較的安定した土地で、営々と集落が営まれてきたことがよくわかる。

仏日山安楽寺

22　根木駅跡

赤穂鉄道のおよその中間点にあたり、他駅の多くが乗客のある時だけ停車する無人停車場であった中、駅長が常勤する基幹駅であった。

23　切山隧道

赤穂は上水道の町として広く知られ、赤穂城や武家屋敷のほか町家各戸にまで給水されていた。切山隧道はこの水路の基点で、池田輝政の時代、慶長19年（1614）から3年の歳月をかけ、時の代官垂水半左衛門勝重の指揮のもと完成した。その後、取水口は正保2年（1645）には高雄の**船渡井堰**に、元禄15年（1702）には**木津取水井堰**に変更された。

荒神社（目坂）

24　荒神社（目坂）

祭神は素盞嗚尊、末社に稲荷社がある。かつての目坂から真殿へ通ずる山道の峠に鎮座している。真殿から峠を越えて移住してきた人々が祀ったものではないかと考えられる。

25　龍永山常徳寺

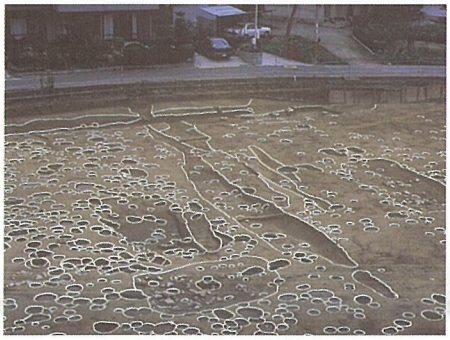
開基は文亀元年（1501）釋順正による。赤穂萬福寺下で真宗大谷派に属する。順正は宍粟郡長水城主廣瀬彌三郎兵庫介親茂の長男である。親茂が仏門に帰依し、祐正と称して真言宗を奉した。文亀元年（1501）、目坂村字清水に一宇を建て、龍永寺と号した。後に順正は本願寺第9世實如法主（1458～1526）に帰依し、真宗に改め寺号を山号にし、さらに寺号常徳寺を受け、以後は寺院を現在地に移して西本願寺派に属していたが、元禄12年（1699）には東本願寺派に入った。

龍永山常徳寺

26　目坂停車場跡

ここから根木駅へは急勾配であり、乗客が多いときは、歩くほうが速いくらい減速してしまうこともあったという。

大避神社（木津）


木津・段ノ上遺跡

道 標 地 蔵

七夕山龍泉寺

太　子　堂

27　大避神社（木津）

祭神は秦河勝、村社である。明暦2年（1656）大工山の麓に建立されたといわれる。皇極天皇3年（644）蘇我氏の迫害から逃れるため難波津を船出した秦河勝は、坂越に漂着後、鳥井の坂を越えて舟で千種川を上り、この地に上陸したという。上陸地点に祀られているのがこの神社である。境内には稲荷神社、荒神社がある。

28　木津・段ノ上遺跡

弥生時代中期から始まる集落跡で、中期末の竪穴住居4棟、後期の竪穴住居4棟が検出された。また中世になると、多数の掘立柱建物とともに青磁、白磁などの多種多様な遺物が出土し、周辺地域との交流が活発であった集落の存在が明らかとなっている。

29　木津・原遺跡

千種川の氾濫原及び中洲の微高地に立地する遺跡で、鎌倉時代以降の建物跡が見つかっている。鎌倉時代の遺構として掘立柱建物跡7棟、土坑8基、溝1条、柱穴多数があり、室町時代の遺構として掘立柱建物跡10棟、土坑8基、柱穴多数がある。赤穂市内では、室町時代の建物跡の調査例が少なく貴重であり、また鎌倉時代から江戸時代まで数百年間にわたる生活が営まれていたことがわかった。

30　道標地蔵

木津方面から来た人々に対する道標であり、「右城下道　左阪越浦下道　牛馬無用」と刻まれている。下道（城下への道）に牛馬が入ってはならないのは、上水道の導水路を清潔に保つためであった。

31　七夕山龍泉寺

開基年月は不詳である。『龍泉寺略縁起』によると、文亀元年（1501）3月、住職の教祐は高野村田端にあった釈善寺が零落するにつけ、壇頭平松三郎左衛門と村内の郷士とで相談し、真宗大谷派への改宗の旨を本願寺第9世實如上人に届け、木津村の柳地区に一宇を建てたという。現在は手能に移転しており、赤穂萬福寺の末寺となっている。寛政元年（1789）6月及び明治23（1890）、25年（1892）の洪水のため寺記類が悉く流失してしまった。

32　木津取水井堰

元和2年（1616）に設置された取水口である切山隧道は、しばらくして浅野長直によって少し下流の高雄の船渡に変更された。これは河川の流路変化と戸島新田開拓のために、用水需要が増加したためとされる。さらに、元禄15年（1702）までに、木津に取水口が変更された。元禄15年の『諸色指出帳』によれば、この井堰維持のため加里屋、塩屋、戸島新田の各町村から年間延べ500人の人夫が出されたという。

33　太子堂

大工村の東の堤防のすぐ下にある。境内には大正11年（1922）に寄進された太子堂縁起を書いた碑がある。境内正面には太子堂が建てられており、壁をへだてて北側に観音堂（護磨寺）がある。本堂の東側には稲荷社が祀られている。創建は寛文2年（1662）で龍泉寺の支坊となっている。

（調査協力：松本　保、大黒正昭、薮内早智子、浦池伸朔）